2022年8月19日(金) 18:30～21:00
講座B（2日目）

「 韓国のファシリテーター 教育プログラムについて 」

[講師] 劉 恩禎 (ユ・ウンジョン 유은정)
[通訳] 沈 炫旼 (シム・ヒョンミン 심현민)
[司会] 柏木 俊彦

◆ 自己紹介

○**柏木**　本日は、文化芸術教育士や学校芸術講師についてさらに詳しく、そして育成プログラムについてもご紹介いただきます。

講師のユ・ウンジョンさん、通訳のシム・ヒョンミンさん、こんばんは。韓国は今大雨で、通信状況が不安定です。画面を消し、音声のみの対応となる場合があります。ではここからユ・ウンジョンさんにお話いただきます。よろしくお願いします。

○**ユ**　私は韓国でTA（ティーチング・アーティスト）として活動しているユ・ウンジョンと申します。今日は韓国のTA現場の事例を中心に、TAがどのように育成され、その活動がどのように発展していくのかという話をします。加えて、以前経験した、また今現在経験している芸術教育の現場についてお話します。このセミナーが、皆さんの質問や悩みを一緒に話し合って、整理する時間になればと思っています。

유은정(Eunjeong Yu, ユ ・ウンジョン)

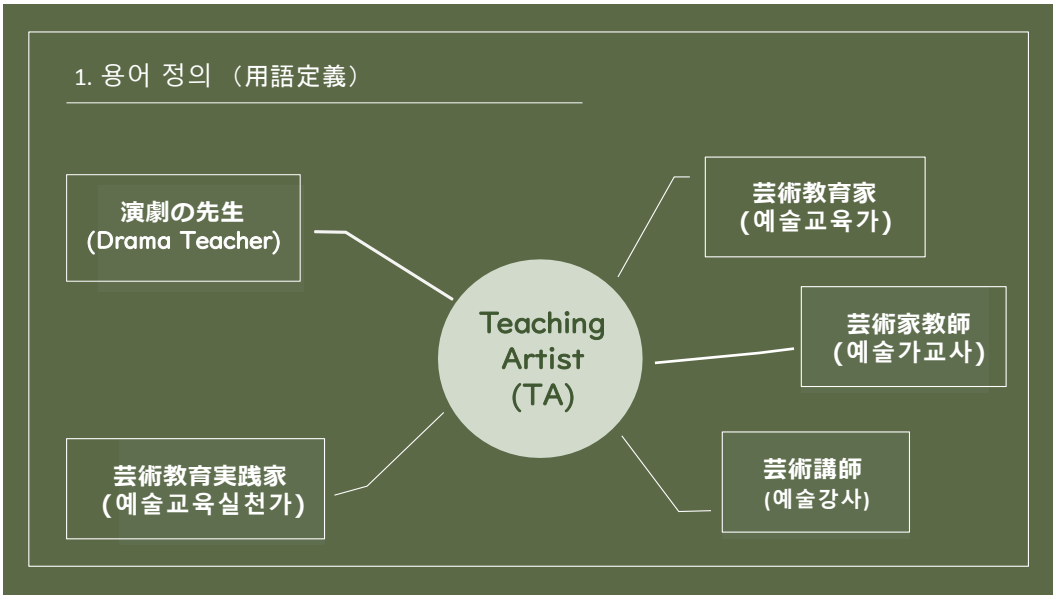
- 演劇演技専攻(学士)／教育演劇専攻(修士)
- 2015年文化芸術教育士修了および資格取得
- 小·中·高等学校演劇分野 芸術教育進行
- ソウル文化財団所属　青少年TA
- 芸術教育支援事業プログラムの企画および実行

まずは私の自己紹介や、どういう活動をしているのかをお話します。

私は大学で演劇演技を専攻していました。卒業後、2015年に文化芸術教育士課程を修了し、本格的に芸術教育家として活動を始めました。活動しながら個人的に葛藤を感じる部分が多くありまして、それは教育に関する学問的な知識でした。演劇を専攻しているので、芸術的な分野の知識には自信があったのですが、教育的な知識については不足していると感じていました。

不足を補うために2019年、ソウル教育大学の教育専門大学院に入学し、教育演劇を専攻しました。その中でドラマと演劇、芸術教育について知識を積むことができました。今年2月『青少年のアイデンティティーとそのドラマ』という研究論文を発表し、大学院を卒業しました。現在はソウル文化財団という自治体の文化財団に所属しており、そこで青少年TAとして活動しながら、さまざまな教育支援事業を企画・実行しています。

■ 「TA」の呼び方



皆さんにお話をするにあたり、まずTAの呼び方を整理したいと思います。韓国では「芸術教育家」、「芸術家教師」、「芸術講師」、「芸術教育実践家」、「ドラマ・ティーチャー（演劇の先生）」など色々な呼び方があります。どこの組織に所属するかによって、呼び方が変わります。

面白いことに「TA」そして「芸術教育実践家」というのは、主にソウル文化財団に所属している人が積極的に使っています。一方で「芸術講師」、「芸術教育家」などは韓国文化芸術教育振興院という機関で主に使用されています。

韓国で「私はTAとして活動しております」と自己紹介しますと、すぐに韓国の人は「あ、じゃあソウル文化財団の所属ですね」という風に連想してしまいます。TAという用語はソウル文化財団が、アメリカのリンカーンセンターと交流したときに、その影響を受けて使われ始めたという経緯があります。

韓国で活動しているTAは、フリーで活動している方が圧倒的に多く、その方たちは自分が持っている芸術教育観などで自分を位置づけて名乗るということがありますので、自分のことをTAとはあまり呼びません。私も実際、ソウル文化財団所属ではありながら、外で自己紹介する際は「TAです」というより「芸術教育家です」と言うことが多いです。

このように韓国では、TAが「自らどう名乗るか」というのがかなり大きなイシューになっています。自分のアイデンティティーとも繋がってきますので。日本で活動されているTAの皆さんも、誰かに自己紹介するときに、自分のアイデンティティーと一番強く結びつく呼び方、用語はなにかというのを一度考えてみると面白いかもしれませんね。

■ 文化芸術教育士

ここからはTAのシステムについてもっと詳しく見ていきたいと思います。

まず、文化芸術教育士から皆さんに紹介したいと思うのですが、恐らく昨日のミン先生の話で、かなり詳しく紹介されていると思います。私の方からは現場の事例を元に簡単に紹介したいと思います。

韓国では2005年に「文化芸術教育支援法」という法律ができまして、そこから文化芸術教育政策がどんどん拡大され、人材の需要も増えてきました。それとともに、より体系的かつ専門的な支援が必要になってきました。芸術家たちと教育、両方を支援していく政策が必要になってくるわけですけれども、その中で生まれたのが2012年から始まった「文化芸術教育士」という制度になります。

実は私も2015年にこの文化芸術教育士課程を修了しまして、2級の資格を取得してから、以前よりもより活発にTA活動を行うことができるようになりました。このコースを修了した人は、様々な機関で優遇対応を受けられるんですね。自分の芸術的な活動領域がさらに広げられる、そういう可能性がある、いい点がいっぱいあります。ですので、演劇の初心者から、TA経験者、芸術経験が多い方まで、経歴を問わず色々な方が、現在このコースで学び、修了しています。

文化芸術教育士課程を履修できる大学は韓国に全部で8つあります。「演劇」はそのうち4つの大学で履修することができます。その4つの大学では演劇授業を通して、演劇教育論や概論、プログラムを実際に構成できるような様々な実技段階の課程を学ぶことができます。この課程を修了したTAは、いろんな地域の財団や公共機関において、芸術教育活動を行うことができます。

そのうち最も活発に活動している自治体文化財団として、「ソウル文化財団」と「キョンギ（京畿）文化財団」を、皆さんに紹介したいと思います。ちなみに、京畿というのは、首都のソウルに隣接している都市で、日本でいうと、埼玉、千葉、神奈川のような地域だと考えていただければと思います。韓国では首都圏に入ります。

■ ソウル文化財団

3. 서울문화재단（ソウル文化財団）

2004年に設立されたソウル市の予算で運営されている財団で、
文化芸術創作および普及、芸術教育、市民文化芸術活動支援を行っている。

先ず「ソウル文化財団」についてご紹介します。ソウル文化財団は2004年に設立されたソウル市の機関になります。ここは文化芸術創作及び普及と、芸術教育、市民に対する文化芸術活動も幅広く行っています。

資料 出典：ソウル文化財団

今ご覧いただいている地図には、ソウルの中心になる区が表示されています。真ん中に流れているのがハンガン（漢江）という大きい河です。ソウル文化財団がその芸術活動を行っている範囲を芸術空間と呼びますが、ご覧いただいている18の場所に点在しています。

この18の空間は劇場だけがあるわけではありません。その中には劇場を含む芸術家たちのための創作空間であったり、実際に芸術教育を行うセンターであったり、ソウル文化財団の事務所まで含まれています。そして、一部の人に限られた場ではなく、芸術家、そして市民に開かれた場所として設けられています。

■ ソウル文化財団の「5つの柱」

ソウル文化財団の事業は、全部で5つの柱があります。芸術支援事業、市民文化事業、創作空間運営事業、そしてソウル芸術教育アカデミー、芸術教育事業、この5つに分かれて体系的に運営されています。

---

① 芸術支援事業……ジャンル別 芸術家の創作活動支援 #芸術家 #創作支援

② 市民文化事業……誰もが楽しめるように、都市を芸術的に経験する
#地域文化　#生活文化　#ストリートアート　#フェスティバル

③ 創作空間運営事業……都心再生プロジェクトの一環として開始
#18個 #芸術創作空間

④ ソウル芸術教育アカデミー……差別化されたプログラム開発及び研究、
特別教育WSの企画及び実施
#教える芸術から経験する芸術へ #美的体験 #総合芸術教育

⑤ 芸術教育事業……美的体験や芸術教育を通じ、幸せな人生を送ることが目標
#子供 #青少年 #学校芸術教育 #一般市民 #市民芸術大学

1つ目の「芸術支援事業」は、主に色々な芸術家の創作活動のために公募を行うところです。音楽、芸術、舞踊、演劇など色々な分野の芸術に対して支援を行う事業です。

2つ目の「市民文化事業」は、主にソウル市の活性化のために集中的に行っている事業で、一般市民が参加できる地域文化イベントや、生活文化イベント、 そして街のフェスティバルなど、市民が芸術をなるべく身近に感じられるような、楽しめるような経験の場を設ける、そういう事業になっています。

この「市民文化事業」では、主に4月、または6月に、市民による街フェスティバルを開催しています。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、韓国の中心地と呼ばれているクァンファムン（光化門）、その中心に流れている川とチョンノ（鍾路）というエリアでは、このフェスティバルの時期に、芸術家たちが様々なイベント、パフォーマンスを行います。市民が、普段自分たちが歩いている街で、誰でも自由に無料で素敵なパフォーマンスを見ることができる、それがこの事業の目的です。

3つ目の「創作空間運営事業」は何かといいますと、ソウル地域内のあまり使われてない、廃れたような施設を、新しい複合文化空間に生まれ変わらせる、もしくは、芸術家のための創作空間として再生させるというような事業です。

4つ目の「ソウル芸術教育アカデミー」は、さまざまな芸術教育、ワークショップの企画、そして運営を行っているところで、特に統合芸術教育のための研究会を支援しています。ここ数年はコロナによって、海外ワークショップが完全に止まっている状態なのですが、以前はアメリカのリンカーンセンターとコラボをして、芸術教育のワークショップを行ったり、交流をしたりもしました。

5つ目の「芸術教育事業」は、美的体験をベースにした児童と青少年のための学校芸術教育、また一般市民のためのソウル市民芸術大学を運営しています。主にTAが活動しているのが芸術教育の分野ですので、これについてはもうちょっと詳しく説明をさせていただきます。

■ 芸術教育のシステム

芸術教育のシステムは、主に児童と青少年のためのもので、児童子ども向け（子供統合芸術教育）と青少年向け（青少年人文芸術教育）に分かれています。

「子供統合芸術教育」は、各小学校に芸術家が出向き、教科と絡んだ芸術教育を行うというものです。

各分野の専門であるTAが集まって、小学校の国語や数学、社会、理科などを、子ど

もたちがもう少し楽しく感じられるよう、一緒に新しいプログラムを作り出します。各芸術家たちが自分の専門分野をその教科と繋ぎ合わせて、子どもたちが自分で学ぶこともできるし、表現もできるという形にまで落とし込みます。子どもたちが一番嫌がる、難しいと感じる数学や科学の教科をアートと繋げる、例えば、絵を描きながら数学と接するとか、化学について考えるとか、そうすると、楽しい、もっと知りたいと思うようになる。そのプロセスを作り出すのが目標になっています。

韓国の小学校は日本と同じく、担任制度です。各クラスの雰囲気や子ども一人ひとりの特性などは、やはり担任の先生がよく把握しているので、TAと担任の先生とでタッグを組み、そこで一緒に協力して作り上げるというのが最も大事なポイントになっています。

次に、「青少年人文芸術教育」について説明します。

韓国は中1の試験がなくなっています。少し前までは、中1までは中間・期末の試験があったのですが、最近なくしてしまいました。そしてその余った時間を……日本でいうと、「総合的学びの時間」というものがありますよね、韓国でも「創意的クリエイティブな学習の時間」というのがあって、そこで色々なことを学びます。

韓国は、皆さんご存じの通り、大学入試がすごく大変なのですが、中1という幼い年から、少しでも自分の進路というものについて芸術を通して考えたり、自分と向き合ったり、そういう時間を持つのが最も大事な目標の1つになっています。「子供統合芸術教育」と同じようなシステムで、各芸術分野の専門TAが集まり、チームを構成して実施していきます。

ソウル文化財団が設けている芸術教育事業において最もよい点は、研究機関があるという点です。芸術家たちが、自分たちが培ってきた、もしくは持っている技術や手法が、教育とタッグを組んだとき、どのようなものが生まれるのか、どのような価値を持つのか、どういう効果をもたらすのかということを、研究するチームがあるのです。

この芸術教育は1年を通した長期のプログラムなのですが、まず4ヶ月から6ヶ月間は、プログラムを研究したり、開発するのに時間を費やします。そして、日本でいう後期、韓国では2学期といいますが、後期にその開発、研究したプログラムを基に授業を行うという流れになっています。

毎回違うチームになりますので、自分がもし演劇を専攻していたら、「私、毎回ドラ

マの人じゃなくて、今度は視覚的な美術分野の人と組んでみたい」というように、自分の芸術教育の目標をどの人と組んだら達成できるか、という視点からパートナーを選んでチームを組み、目標達成を目指してゆきます。

子どもと青少年に向けた芸術教育は、単純に芸術家を学校に派遣するという制度で終わるのではなく、授業を行うことで子どもたちにどのような影響を及ぼすのかという研究もしていく。それを積み重ねていくということも、とても大事です。

またその中で、TA同士で行われる交流、話し合い、そこを長期的に支援して行くのがこのソウル文化財団の働きとなっています。このように、韓国のTAの育成課程は、学校教育とタッグを深く結んで活動できるようになっています。

■ 京畿（キョンギ）文化財団

次は「京畿文化財団」について紹介したいと思います。京畿文化財団は、京畿道（キョンギド）という地域の文化芸術の振興のために、1997年に韓国で初めて設立された公共文化財団です。2008年から本格的に、道立の博物館、美術館などを統合して運営、国内最大級の文化芸術専門組織として成長していて、現在は芸術教育の方にもかなり力を入れています。

京畿文化財団は、「教師と芸術家の協力教育支援事業」に力を入れています。ソウル文化財団と似ており、同じようなシステムで、学校教育と芸術家を繋げるようなことをやっています。京畿道にいる教師とTAが連携して授業を行っていくのですが、ここは特に、教育演劇分野が強みです。

ソウル文化財団はどちらかというと、芸術家同士の組み合わせが大事なのですが、京畿文化財団では、学校のどういう教師とどういうTAが組むのかという、教師とTAの組み合わせが一番大事にされています。そのため、学校の先生が持っている子どもについてのデータ・知識と、芸術家たちが持っている専門知識を合わせて演劇教育のシステムを構築していき、更に発展させていくという形を取っています。

■ 教師とTAの協力システム

本日のテーマが「韓国のTA育成課程プログラムについて」なのに、なぜ教師と芸術家の協力システムの話をするのかと思われる方もいらっしゃるかもしれません。韓国では現在、教師とTAの協力が非常に重要視されているので、私も関わっているこの部分

について、皆さんにぜひ紹介したいと思いました。

先ず、「韓国文化芸術教育振興院」について紹介したいと思います。「韓国文化芸術教育振興院」は「アルテ（arte）」とも呼ばれています。アルテは文化芸術教育支援法に基づいて設立されました。昨日ミン先生のお話の中にも出てきた、文化体育観光部（日本の文部科学省に近い行政機関）の傘下の公共機関になります。韓国で行われている様々な芸術支援事業は、全てこのアルテが主催・企画をしています。

また、ソウル文化財団と同じように、各分野の芸術家たちがアルテに所属しており、そこから学校に派遣されるような芸術教育システムもかなりしっかり構築されています。アルテに所属しているTAたちが学校に派遣される過程などは、ソウル文化財団や京畿文化財団と同じような形態を取りますので、ここからは教師、芸術家協力システムについて紹介したいと思います。

4. 교사-예술가 협력 시스템（教師・芸術家 協力システム）

2021 テーマ中心の＜芸術で探求生活＞

今ご覧いただいている写真は、2021年に行われた教師と芸術家の協力プログラムの模様です。ここでは小学校の教師と各分野の芸術家が、一緒に1つのプログラムを完成させて、小学校の教科科目の内容とマッチングさせる、それを子どもたちに経験してもらうという内容になっていました。

芸術家たちは一緒にチームを組むことになった教師の元に派遣されます。派遣された先では、もうすでに構築されたプログラムを子どもたちと一緒にやるので、システムが非常にしっかりしており、安定してプログラムを実行できるようになっています。

これは支援事業ですので、あらかじめ支援金をもらって、予算にあったプログラムを作るような感じになっています。一緒にチームを組んだ教師のクラスへ派遣されていくので、担当教員、学校の教員に対する支援金より、派遣されるTAに対する支援金の方が、比重が大きくなっています。

このシステムを見ますと、やはり財政的に少々厳しい状況に置かれているTAたちに、支援金を与えることで、彼らがもっと生き生きと芸術活動を行えるように支援するというところに意味があると思います。

2022年からは、ちょっと違う形なのですが、小学生の児童たちを対象にしたオンラインコンテンツを作るプログラムをやっています。これも同じように、教師と芸術家がタッグを組み、子どもたちと一緒に映像コンテンツを作っていくという内容です。子どもたちが普段から慣れ親しんでいる映像コンテンツを仲間と一緒に作り、完成したものが教育庁や教師たちのところに送信されて実際の公の場に出る、という経験ができるプログラムになっています。

■ 文化芸術教育ODA ベトナム

4. 교사-예술가 협력 시스템（教師・芸術家協力システム）

2018~2022 文化芸術教育ODAベトナム

* 공적개발원조 公的開發援助, ODA: Official Development Assistance

※ODAはOfficial Development Assistance（公的開発援助）の頭文字。

異なる分野との協力システムについて紹介したいと思います。この写真は2018年から2022年まで行われた「文化芸術教育ODAベトナム」のものです。ベトナムで行われ、現地にいる先生、そして学生たちのために芸術家たちが直接出向きまして、芸術教育を行

うための研修を提供するという内容になっています。このプログラム自体は今年で10年目を迎えています。

私が関わらせていただいたのは2018年から2022年で、4年間、ベトナムの現地の方たちに研修を提供しました。「システムをもう少し勉強したい、芸術教育についてもう少し勉強したい」という方たちへ向けて、韓国から派遣された芸術家たちが研修を行ったり、一緒に協力してプログラムを作ったりします。「現地の子どもたちがもう少し身近に芸術に触れられるように」というのが目標です。

2018年、コロナ直前までは、韓国からTAを派遣していたのですが、コロナが始まって、それからはオンラインで研修を行っています。「教師とTAの協力」というテーマからは少し逸れるかもしれないのですが、ベトナムという国と韓国が、芸術を通して協力する、交流する、そしてそれがかなり肯定的な効果をもたらしたということで、いい事例かなと思い、ご紹介させていただきました。

■ 一緒に考えたいトピック

今まで話した内容を元に、私が個人的に皆さんと一緒に考えてみたいトピックをいくつか挙げてみました。

「TAはなぜ学校の教師と協力をしなければならないのでしょうか」
「教師とTAの共同の目標は何でしょうか」
「教師とTAが互いに補い合える部分は何でしょうか」

私は日本の芸術教育システムについてよく分かっていないのですが、自分が実際に学校で、先生たちと組んだり、TAとして活動するときに、いつも自分の中で「どうだろう」と抱えているのが、この3つになります。これらを、皆さんと一緒に考えることができればと思っています。

■ 韓国文化芸術教育振興院（アルテ）で行われている研修

ここからは、韓国文化芸術教育振興院（アルテ）で行われている研修について、皆さんに紹介したいと思います。

アルテアカデミーは韓国の文化芸術教育を牽引する人材、芸術家、教師の養成を目的とする、国内唯一の文化芸術教育専門の研修課程です。学期によって夏と冬に分かれて

おり、対象別にも教育課程が分かれています。研修は全員が1か所に集まって行うオフラインの集団研修もありますし、オンライン研修もあります。

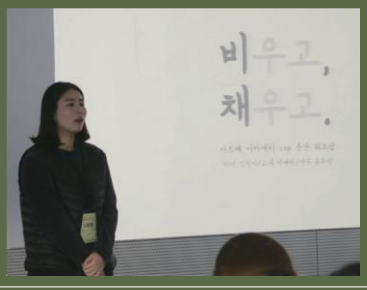
5. 교사-예술가 연수(教師-芸術家 研修)

- **韓国文化芸術教育振興院 (arte academy)**

- 韓国の文化芸術教育をリードする人材養成を目的とした国内唯一の文化芸術教育 専門研修課程
- 対象別教育課程を体系的に運営。団体研修以外にオンライン研修、自主研修などで参加

- **研修対象 (연수대상)**

- 芸術講師：芸術家としての芸術講師の養成
- 教員：学校文化芸術教育の変化を導き出す促進者の養成
- 企画者：市民文化芸術教育企画を通じた社会的価値の拡散
- 行政人材：文化芸術教育への理解及び支援



研修対象を見てみますと、まず芸術家としての芸術講師、TAを養成する。次に教員、この中には校長も含まれます。学校文化芸術教育の変化を導くキーパーソンを養成するのが教員に対する研修です。そして次が企画者。市民文化芸術教育企画を通して、社会的な活用を広めていく人を養成するプログラム。最後に行政の人。文化芸術教育に理解があり支援できる人材をこの研修で育てることになっています。

芸術講師に対する研修においては、自分が主としているジャンル、一番得意にしているジャンルだけではなく、自分とは違う別ジャンルの人と融合できる力を育てるという内容にもなっています。

学校における学校長や教師の場合は、子どもたちが芸術をより幅広く受け止め、経験できるようにするためのキーパーソンになるので、そこを重点的に研修で勉強します。そして企画内容自体は一般の市民を対象にしたものなので、企画を考える段階で、このような教育がどう組み立てられて、どう実行されるべきなのかについて悩んだり、勉強したりする機会があるということになります。

行政に対しての研修は、そもそも文化芸術教育がなんなのかということからまず教えます。そしてそれをどのようにして皆が十分に楽しんでいけるようにするのか、またどんな方法で支援していくのかを、この研修課程で学んでもらいます。

アルテの教師研修の課程は、TAのみならず、学校、企画者、行政、皆のためのものとして、芸術教育をどのようにして社会に溶け込ませるのか、そして芸術を基点にして、彼らがどのようにお互いウィンウィンで嬉しいものを作っていけるのかというのがここで話し合われ、実現されていくので、とてもいいシステムになっていると思います。

■ TAのためのネットワーク

次はTAのためのネットワーク、および研究会についてご紹介します。公式のものだけではなく、TAたちが自発的に集まって行うようなものについても紹介したいと思います。

ここでは、2020年にソウルで行われた「ITAC 5（アイタックファイブ）inソウル」と、「質問の進化」と題される「TA月刊ウェビナー」、最後に「ソソテーブル」と名付けられた研究会について皆さんに紹介します。

どれも最近のものになります。芸術教育現場の人たちにとって、このコミュニティーはなぜ必要なのか。そしてどのように運営されて、どういう話がされるのかについて、紹介したいと思います。

■ ITAC5 inソウル

先ず最初にご紹介するのは、2022年に行われた「ITAC５」というカンファレンスです。こちらは全世界のTAが繋がるカンファレンスとしてとても有名ですし、そういう位置付けになっています。時代ごとに今一番話題になっているものについて話し合い、各国のTAたちは今どういうスタンスでそれらをとらえ、どう向き合っているのかについて、お互い情報交換を行う場になっています。

私にとってこのITAC５が特別な理由は、2020年、まさにソウルで行われたITAC５で、日本演出者協会の、今司会を務めていらっしゃるトシさん（柏木俊彦）とも、ここで出会えたからです。このITAC、次はノルウェーで行われる予定です。興味のある方は参加してみてはいかがでしょうか。

■ TA月刊ウェビナー「質問の進化」

次は2021年に行われた、ソウル文化財団のソウル芸術教育TA月刊ウェビナー、題して「質問の進化」について紹介したいと思います。

ウェビナーとは、ウェブとセミナーをくっつけた言葉で、各テーマのもとにTAたちが集まって、それについて議論したり、意見を交換したりすることができる場になっています。TAたちが現場で抱えている課題について、「皆が質問を投げ合う」というところから「質問の進化」という名前になっています。

昨年は特にコロナが一番ひどかった時期ということもありまして、テクノロジーや環境についてのトピックが非常に多かったのですが、それらも含めて非常に様々なトピックについて話ができました。特に同じ時代で活動しているTAたちは、今どのようなスタンスで社会の色々な課題と向き合うべきなのか、そして子どもや市民たちにどういうメッセージを投げかけるべきなのかということについて、TA同士が大いに話し合う、そういう機会でした。

（ウェビナーのテーマ）「テクノロジー時代の芸術と芸術教育」について。韓国ではテクノロジーのシステムが非常に速い速度でどんどん変わっており、発展しています。テクノロジーと芸術はどのようにコラボできるのか、また、そのポイントはどこなのか、そして、2つを融合するにはどのようにしていけばいいのかについて話し合うウェビナーもありました。

（ウェビナーのテーマ）「芸術教育の公共性における争点と互恵的文化づくり」について。「互恵」とは、どちらかが恩恵を与えるのではなくて、お互いによい関係、お互

いが嬉しい関係、ウィンウィンの文化を作るという意味です。芸術教育の現場、公共の場が抱える問題はなんなのか。実際に公共の場で芸術教育を行った実践家にインタビューをして彼らの話を聞くといった内容のウェビナーでした。

このようにソウル文化財団では、「月刊」というぐらいですので、毎月このウェビナーを行っています。TAと各分野の芸術家たちが集まり、どういう課題を今抱えているのか、社会で今何が起きているのかについて話し合う大事な場になっています。

■ ソソテーブル

次にご紹介したいのは、一番最近のもので、ソウル文化財団が行った「文化芸術教育実践家のための研究会」、題して「ソソテーブル」です。

この研究会では芸術教育実践家たちによって全部で15の研究チームが作られました。芸術家たちは自分がやりたい、考えてみたいトピックを選びます。そして、同じような興味関心を持っている芸術家を自分で集め、そのトピックについて、自発的かつ主体的に研究を行います。

これはただ集まって研究し、ただ話し合いをするというような、単なるネットワークで終わるのではなくて、ある程度の支援金が出ます。それによって、ここで話し合った内容を、実際の生産的な活動に繋げるところまで持っていくことができます。そこがすごく大事なポイントだと思います。

私も15の研究会の中の1つに参加しました。私たちが選んだトピックは「難民」でした。我々の近くにいるけれど見えない存在、彼らをどのように「見える化」していくのか、そして彼らの話をどのように聞くのか、そういう姿勢をどうやって持つのか、芸術と融合させてどのように人々に伝えていくのかというところを話し合いました。

そして、研究で終わらせるのではなく、チームでプログラムを作るところまで行いました。実際韓国に在住している難民の方に来ていただいて、皆で彼の話を聞き、彼がどういう人生を送ってきたのかというのを、芸術とあわせて表現するというところまでやりました。

6. TA를 위한 네트워크 및 연구모임（TAのためのネットワーク及び研究会）

- 2022 ソウル文化財団 文化芸術教育実践家のための研究会＜ ソソテーブル ＞

今ご覧いただいている写真の中の女性は、エジプトから来た難民の方です。彼女が、自分のこれまでの人生について1人で喋る、という形の演劇で表現をしているところです。

このような研究会は、TA同士の繋がりだけで終わるのではなく、社会的に少しセンシティブと思われるようなトピックについて、子どもや市民たちにもっと抵抗なく受け入れてもらえる、考えてもらえるようにするところに、いい働きがあるのかなと思います。

ソウル文化財団ではこのように、自分の興味関心がある社会のトピックだけではなく、TA自身のアイデンティティーに関わる話をはじめ、様々なことをTAのネットワークを通して話し合い、必要な行動を起こしていくということが、常に積極的に行われています。そのようなネットワークを作ることが非常に大事であると、組織の中でも重視されています。

■ 最後に～TAのアイデンティティー

先ほども、いくつか皆さんと一緒に考えてみたいことをお伝えしましたが、またここまでの話で、皆さんとシェアしたい、私の中の悩みはこの2つです。

「TAに必要なものはなんでしょうか？」
「TAはどんなアイデンティティーを持って、芸術教育の現場に存在すべきなのでしょうか？」

特にこの2番目の質問は私だけではなくて、韓国のTAたちの中でとてもホットな話題です。自分は芸術家なのか、それとも教育家なのか。芸術教育の現場にいるTAたちの間で、自分のアイデンティティーについてのこの質問は、とても熱い話題になっています。

韓国のTAシステムについて、今まで話を聞いてくださった皆さんが、どういう風に感じていらっしゃるのか、そして私の講義を聞いて皆さんが疑問に思ったことを、ぜひ一緒に話してみたいと思います。

◆ 質疑応答

○**柏木**　ウンジョンさん、ありがとうございます。昨日講義をしていただいたミン先生も交えて簡単にディスカッションしてから、質疑応答の時間にしようと思っております。

○**ミン**　ユさん、今日は素晴らしいレクチャーをありがとうございました。文化芸術教育のあり方について常に考え、常に悩んでいるユさんのお話を聞いて、大変感銘を受けました。

今日の話を聞きながら、韓国文化芸術教育振興院と、地域文化財団の役割について少し考えてみました。

韓国文化芸術教育振興院は国の機関ですので、多くの人たちが文化芸術に触れることができる機会を提供するのと、多くの芸術家が文化芸術教育に携われるように機会を提供するということに重点が置かれているように思えます。

一方で地域文化財団は、地域の事情に基づいて教育システムを開発することに重点が置かれているように思います。特に、質の高い教育を提供するために、どうすればTAたちの質を高めていけるのか、力量を高めていけるのかということについて考えられていると思いました。

例えばソウル文化財団の場合は、ご紹介してくださった研究会やネットワークを通して、TAが研修を受け、自問自答しながら、自分の芸術教育のあり方を考える場が用意されているように思います。文化芸術教育に携わっている芸術家というのは一般的な先生方とは違います。

普通の小学校や中学校の先生方は、定期的に研究会に行ったり、研修を受けることができますが、アーティストの方々はなかなかそういう機会がないんですね。なので、そういった機会を地域文化財団が提供してくれているのではないかと思います。実際ある程度、地域文化財団の役割というのは、そんなふうに分けられているように思います。

1つ質問があります。ソウル文化財団がやっている教育プログラムの中に、2つ、複雑なシステムがあるのではないかと思います。1つは、自分と違うジャンルの人とチームを組まなければならないこと。そしてもう1つは、音楽や美術や演劇という教科ではなく、全く違う教科の中でこういった文化芸術を生かして、プログラムを開発しないといけないということ。

この2点の複雑な仕組みがあるように思いました。ユさんの経験から、それをどのように準備して、どのように難しさを克服してきたのか、その辺をお伺いできればなと思います。

○ユ　とても良いフィードバックと質問をありがとうございます。まず、違うジャンルのTAとコラボするということについてなんですけれども、今でも発展中というところだと思っています。自分が属している、強みとしている分野だけに固着するのではなく、もっと色んなジャンルに触れることで、自分自身も幅広い視野を持つ機会がそこで得られるのではないかと思います。

とは言え、やはり現実問題はあります。違うジャンルですから、アーティストの中には自分のジャンルが目立つようにしたいという人も結構いまして、そこのバランス、塩梅が非常に難しいところではあるなと私も現場で感じています。韓国国内で「統合」という言葉がすごく強調される風潮があるのですが、 この件においても統合精神を発揮して、ジレンマを乗り越え、いかにして一緒にやっていくのかというのも、非常に大事な課題だなと思っています。

2つ目の質問、芸術とかけ離れたように見える数学、科学、社会などの教科を、どういう風に芸術とコラボさせるかということについて。先ほども強調しましたが、とても大事になってくるのが、子どもたちとTAの間にいる、学校教師の役割です。やはり芸術家たちは、教科に対する学問的知識は教師に比べると明らかに足りないわけで、その足りない部分を教師が埋めてくれます。

そしてTAたちは、教師から教科についての様々なことを学び、その教科内容をどのように芸術的表現に落とし込むかを考えます。ただ座学でその教科を勉強するのではなく、学んだことをどのように自分の中で消化し、さらにどのように表現できるかまで導く。それが、ここでのTAの役割かなと思います。

先ほど子どもと青少年に向けた、TAと芸術家の協力プログラムについて説明させていただきましたが、その中で数学と演劇を結びつけて行った授業があります。小学3年の分数を演劇で表現するということに挑戦しました。分数というと、必ず覚えるという過程が入ると思うのですが、それをいかに演劇で表現する形に落とし込むかというところに最も力を入れました。

そのプロジェクトをやったときに、「本当に分数が嫌いなんだよね」と言っていた子どもたちが、「数学すごく面白いかも」、「楽しかった」と言ってくれたり、「前はなにを言っているのかちんぷんかんぷんだったけれど、すごく分かりやすくなった」というフィードバックをくれて、やはり教科と芸術分野がコラボするのはとても大事なのだなと、改めて感じました。

○**柏木**　私からも少しだけ質問していいでしょうか。ソウル文化財団やアルテにはどうやったら採用されるのでしょうか。

○**ユ**　まず、面接が必要です。公募で「芸術教育家を採用します」というのが上がってくるので、その期間、その地域で働いてみたいなと思ったら志願して、面接を受けて受かったら学校に派遣されます。

アルテとソウル文化財団には大きな違いがありまして、アルテは1回TAが契約を結んだらアルテの所属となり、クビになることはありませんし、自分から辞めない限りずっと雇用が続くそうです。

しかし、地域文化財団、ソウル文化財団などの場合、契約は1年単位なので、1年の契約が終わったら、更新するためにもう1度自分で志願しないといけない。そしてまた審査があるので、ソウル文化財団所属のTAたちは1年経つとストレスを感じ、ドキドキしてくるということです。

結構アイロニーだなと思うのが、ソウル文化財団のTAの採用というのは、財政状態が悪いTAたちを救うためのものだったはずなのに、1年ごとに再契約をしないといけないシステム、誰かが受かって誰かが落ちるというシステムは、TAたちを逆にすごく不安にさせるというシステムではないかなと、自分自身所属していながら考えます。

○**柏木**　ありがとうございます。色々な質問が来ています。1つ1つ聞いていきたいんですが、まず、チャットに上がっている質問です。「日本でもアーティストが小学校に行くことがありますが、先生と一緒にプログラムを考える時間を取るのが難しいと言われてしまうことがあります。韓国では、先生が一緒にプログラムを考えるシステムは、最初から導入されているんでしょうか。また、先生は一緒に考えることを前向きに捉えていますか？」

○**ユ**　先ほど紹介した京畿文化財団やアルテのようなところでは、TAと学校の教員が協力する場合、いきなりTAが学校へ行くのではなくて、その前に研究期間というのを必ずとります。

その研究期間は子どもたちのためということもありますが、TAと学校の教員の協力体制を作る、関係を作っていく、息を合わせていくというとても大事な時間になっています。その中で、とても密度の高い時間を過ごし、濃い内容の話をしていきます。研究期間にびっちり考え上げられたプログラムを、後に子どもたちと一緒にやっていくということになっています。

研究期間の間、2人がコラボするために、色んな話をします。教師の方はTAに、どういうジャンルが得意なのか、どういう経験をしてきたのか、どういうものを提供できるのか等を訊き、TAは学校の教員に、クラスの雰囲気やどういう子がいるのか、特徴的な子はいるのか、子どもたちが特に難しいと言っている教科はあるのか等を、常に話し合って作り上げていきます。結果、子どもたちに質の高いものを提供できますし、研究

期間をしっかり取ることで関係性も築き上げることができます。

質問と少し離れてしまうかもしれませんが、韓国の小学校の教科、国語の中には演劇という単元があります。演劇もTAと教師が一緒にコラボしてやっていくのですが、やはり芸術的なことは負担だという先生もおられ、演劇は全部TAに任せるという先生も中にはいらっしゃいます。

TAは基本、学校を拠点にして活動していないので、教員との協力関係はとても大事ですが、現場においてのジレンマはあります。そのジレンマを乗り越えてやっていくべきなんだなという風に、私も現場で感じています。

○**柏木**　他にもチャットにコメント、質問がきています。「ソソグループ、大変興味ありました」それから「韓国で難民などの社会的なテーマを研究されているということでしたけれども、そのような社会的、また、政治的なテーマを用いた芸術表現や教育は、市民や学校にどの程度受け入れられるのでしょうか？　日本ではそのようなテーマはなかなか難しいと感じているんですけれども……」という質問です。

○**ユ**　もちろん韓国においても状況はそこまで変わりません。社会的に敏感な部分について拒否したり、反感を持つというのはやはりあります。学校においても、いくら芸術活動ではあっても、政治色が強かったり、社会的に敏感な問題を取り上げたいと言うと、学校側から強く「いや、それはちょっとやめてくれ。できるだけ美しい話、綺麗事とまでは言わないが、ちょっと綺麗な話にまとめてくれ」という要望はかなり来ます。

TAの立場からすると、それが本当に子どもたち、そして一般市民にとってよいのか、敏感だからとにかく隠す、なかったことにするというのは、芸術の観点からもあまりよくないんじゃないかと思ったりします。現場のTAたちが抱いている悩みとも言えると思います。TAたちの間では、多様性だったり、少数の立場、マイノリティーの人たちにポイントを置いてそれを浮き彫りにさせるような、そういう動きが活発なんです。

特に難民だったり、移住してきた外国人女性、子ども、老人、労働者などですね。少数の弱者たちの話題を持ち出して芸術的に表現することで、自然に皆がそこに触れられる、それを話し合える糸口になるのが芸術の役割だと私は思っているので、まだまだこの部分は、頑張っていく必要があるのかなと感じます。

表現の自由がある芸術家だからこそ、自然と社会的に敏感なところに関心を持ちやすくなるのかなというところがあります。そういう観点からもTAは責任感を持って仕事

をするべきだと思いますし、トピックを選ぶ際にも、そういうことを考えてやるべきだなと。これからもっと勉強していくべきだと思っています。

○**柏木**　ありがとうございます。では時間も迫ってきたので1点だけ。「TAの小中学校の演劇教育において、人気のあるテーマはなんですか？」

○**ユ**　小中学校では成長レベルが全然違うので、トピックも異なります。小学校に限って話をさせていただきます。好きなトピックがあるというよりは、この学年のうちに読まねばならない読書リストがあります。

ですので、多いのは、読書リストの中の物語だとか、国語の教科書に含まれている演劇の単元でその物語を活用することも多いのですが、TAが特に自分がシェアしたい、子どもたちと話してみたいという意思で、自らプログラム開発をする場合もあるんですね。小学校高学年では、教育の目標が世界史や多文化に置かれていることが多いので、社会単元と結びつけてトピックを選ぶこともあります。

私は難民をトピックにして授業をやったこともありますし、韓国において、中学校と高校においては自分のアイデンティティーが 非常に大事なトピックなので、それと絡めた授業が非常に多いです。子どもたちに直接「やりたいトピックはなに？」と聞くと、口を揃えて「恋愛ものがいい」といいます。

○**柏木**　ありがとうございます。今アイデンティティーの話で気になったことがあります。ニューヨークのTAの人と話すことがあるのですが、ニューヨークのTAたちもアイデンティティーを扱うアクティビティーをすごく強く推しているんですね。もしかしたらアメリカから韓国に輸入されたのか、もしくは韓国の人のアイデンティティーが揺らぐようなことが過去にあって、今それを取り戻そうとしているのか。それについて演劇が力になれることが起きているのかと感じました。

では時間になりました。いただいた質問、本当にありがとうございます。答えきれなかった質問は、少し時間がかかるかもしれませんが、メールでお返しできるようにいたします。

本日は最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。そして、ユ・ウンジョンさんありがとうございます。ミン先生もありがとうございました。最後に一言ずつ、ミン先生からお願いします。

○**ミン** 今日はとても素晴らしいレクチャーだったと思うんですけれども、もう1つ感動

したのが、たくさんのご質問をいただいたということです。韓国の文化芸術教育に対してこんなに関心が高いんだなということが分かってちょっと胸がいっぱいになりました。ご質問くださった方々、本当にありがとうございました。ユさんもお疲れ様でした。

○**ユ**　今日はこのような場を作っていただいて、本当にありがとうございました。このような韓国と日本の交流に参加できて、私自身もいっぱい学べましたし、皆さんと一緒に学べるトピックや、いろんな話題が出て嬉しかったです。

少し残念だったのは、このセミナー、私が担当した部分がTAの育成プログラム課程についてだったのですが、やはり質問していただいた内容を見ると、TAたちが持っている価値観とかアイデンティティーについての質問が多かったので、もう1回それについて話し合える場があったら嬉しいなと思います。期待していたいと思います。

○**柏木**　カムサハムニダ。本日はここまでにいたします。皆さまご参加ありがとうございました。